（様式１）

プロジェクト番号	07F001

研究進捗状況報告書の概要

１　研究プロジェクト

学校法人名	東日本学園	大学名	北海道医療大学大学院
研究プロジェクト名	認知症高齢者のトータルケアに関する学際的研究 －複雑系に属する認知症高齢者への直接的ケアの開発		

２　研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

認知症高齢者の研究は、脳生物学的な研究などによって進展しつつあるが、人々の生活という観点にたてば、彼らのケアの方法を確立していくことは必須である。ケアは人と人の間に現象することであり、社会をバックボーンとしている。したがって、ケアは、経済や施策、人間の尊厳といった社会基盤状況の観点、健康な時点を含め予防から疾病期、ターミナル期という時間の観点、ケアが行われる施設や地域という場の観点、ケアにかかわる人々という人的観点からのアプローチが必要である。本研究では、こういった観点からケアをトータルに捉え、21世紀における世界の最重要課題である認知症高齢者のトータルケアを目指す。

認知症高齢者のケアは、本人・家族や地域の人々・専門職者の３者間で繰り広げられている。また、認知症高齢者本人への直接的ケアに関しても、嚥下機能や不可解な行動の意味やそれへの対応など、複雑な要素が絡み合って成立している不明な領域が多々残されている。本研究では、そのような現状を踏まえ、認知症高齢者の予防期からターミナル期までを視野におさめ、一方ではケアにかかわる本人・家族や地域の人々・専門職者間に新たに生じている問題の実態を把握し、もう一方では、複雑系に属する本人への直接的なケアの方法を開発する。最後に、認知症高齢者のトータルケアの全体図を構成することを目的とする。

３　研究プロジェクトの進捗及び成果の概要

【地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動】では、石狩市の運動教室を拠点とし、体力トレーニングによる認知症予防対策の効果検証を行っており、現在、認知症の人々の外出支援活動も行いながら、健康な高齢者から認知症高齢者までを含めた包括的なプロジェクトとして研究を展開している。**【地域における住民参加型活動の開発と評価プロジェクト】では、**認知症のキャラバンメイト登録者 21 名の面接インタビューと北海道内の認知症キャラバンメイト登録者約 2 千名に、活動の内容と意識に関する調査を行った。その結果、6 割以上が認知症の理解のための啓発や支援活動を実施していること、今後の活動意向が高いことを得ている。**【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】では、**認知症高齢者の摂食・嚥下機能の特徴と評価法に関する文献、特に認知症の原因疾患別にみた特徴についての検討と日本における摂食・嚥下機能評価における現状と課題についての実態調査から、彼らに特徴的な摂食・嚥下機能の評価指標を作成中である。また、嚥下機能障害者と健常者の嚥下動態、摂取可能食品アンケート法による咀嚼能力評価法の確立、脳梗塞後のリハビリテーションにおける咀嚼の有効性の検討を脳梗塞モデルラットの作成と飼料形態による比較実験を行った。その結果、液体飼料飼育は固形飼料飼育に比して、空間的学習・記憶機能が明らかに低下していることを確認した。**【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】では、**日常的に使用可能な睡眠・覚醒の測定方法と生活上の変化を評価する視点についての検討を札幌市

プロジェクト番号	07F001

の高齢者施設において，生活の場の光環境調整を行って、睡眠・覚醒リズムの変化とそれに伴う生活上の変化について記述を重ねている．また、潜行性の意識障害・変容を鋭敏に検知できる評価法を確立するために，意識の低下・変容による行為や動作の障害と，大脳機能低下による行為や動作の障害を観察によって鑑別するための指標の作成を目指し、意識障害のない対象の器質性の行為・動作障害を分類する動作区分を作成してし、現在は，意識障害のある対象の器質性の行為・動作障害について検討している．**【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】では、**認知症をめぐる諸問題と研究方法における課題を明らかにし、認知症の生活世界を背景で支える医療化と脱医療化の問題などを人類学的視点から検討した。また、生活世界の解明の観点から、グループホームと認知症専門病棟に暮らす認知症の人々の行動観察を行っており、認知症の人々の会話上のコンフリクトを緩和するための「会話分析プロファイル」の日本語版も作成中である。さらに、ケアにおける経済的側面の検討のために、日本との比較を念頭に、アメリカの公的医療保険制度と医療扶助に関する公的介護保障の特徴を明らかにし、ヴァージニア州フェアファックス郡役所の職員や NPO に対してヒアリング調査なども開始している。最後に、認知症の倫理的問題を明らかにするために老いゆく脳と活性化の問題、認知と言葉を超えた世界についての考察をしている。**【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の可能性】では、**音楽療法士や医療福祉従事者からのアンケート調査から、認知症高齢者の音楽療法の現状を明らかにし、病院や施設職員に対する音楽療法の啓蒙・啓発教育を実施した。また、実際の現場の環境や人的資源を有効に活用し、ターミナル期にある認知症高齢者における音楽療法の「場」のもたらす意味を探っている。
以上のように，申請時に提出した研究計画書に従って順調に研究を遂行すると共に，研究成果によって見出された新たな課題に対しても，さらに研究手法を拡大しながら進めている状況である。

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

平成19年度選定「私立大学学術研究高度化推進事業」（学術フロンティア推進事業）研究進捗状況報告書

１ 学校法人名　東日本学園　　２ 大学名　北海道医療大学

３ 研究組織名　大学院看護福祉学研究科

４ プロジェクト所在地　北海道石狩郡当別町金沢 1757

５ 研究プロジェクト名　認知症高齢者のトータルケアに関する学際的研究
－複雑系に属する認知症高齢者への直接的ケアの開発－

６ 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
阿保　順子	看護福祉学研究科	教授

７ プロジェクト参加研究者数　１９　名

８ 該当審査区分　理工・情報　　生物・医歯　　人文・社会

９ 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
井出　訓	看護福祉学研究科・教授	地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動	研究の統括、データ収集、分析と考察
森田　勲	看護福祉学部・教授	地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動	研究の統括、データ収集、プログラム指導
森　伸幸	心理科学研究科・講師	地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動	データ収集、統計的データ分析、報告書作成
工藤　禎子	看護福祉学研究科・准教授	認知症の人が暮らしやすい地域づくりをめざす認知症キャラバンメイトの活動と意向	研究計画立案、データ収集、分析、報告等
竹生　礼子	看護福祉学部・講師	認知症の人が暮らしやすい地域づくりをめざす認知症キャラバンメイトの活動と意向	研究計画立案、データ収集、分析、報告等
山田　律子	看護福祉学研究科・教授	認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価	認知症の原因疾患別に摂食・嚥下障害の特徴を整理し、臨床実践で実施可能な認知症高齢者の摂食・嚥下評価指標の検討
内ヶ島　伸也	看護福祉学部・助教	認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価	認知症高齢者の意思決定に基づく評価方法の検討

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

平井　敏博	歯科研究科・教授	認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価	義歯装着者(無歯顎患者、多数歯欠損患者など)に対する総合的な咀嚼能力評価法の確立、咀嚼の脳機能に及ぼす影響要因の検討
萩野　悦子	看護福祉学研究科・准教授	認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発	研究計画立案、データ収集、分析、報告
中川　賀嗣	看護福祉学研究科・教授	認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発	研究計画立案、データ収集、分析、報告
西　基	看護福祉学研究科・教授	認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発	研究計画立案、分析
阿保　順子	看護福祉学研究科・教授	認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価	研究計画立案、データ分析、報告
薄井　明	看護福祉学研究科・准教授	認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価	研究計画立案、データ収集、分析、報告
櫻井　潤	看護福祉学部・講師	認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価	研究計画立案、データ収集、分析、報告
花渕　馨也	看護福祉学研究科・准教授	認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価	研究計画立案、データ分析、報告
小野　滋男	看護福祉学研究科・教授	認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価	研究計画立案、文献考察、報告
近藤　里美	看護福祉学研究科・准教授	認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の可能性を探る	認知症高齢者のターミナル期における援助のひとつとしての音楽療法の実践と評価
（共同研究機関等）			
池田光穂	大阪大学コミュニティーデザインセンター＆フィールドデザイン部門・教授	認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価	研究計画立案、データ分析、報告
千葉　由美	千葉県立保健医療大学・准教授	認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価	認知症高齢者に使用可能なエビデンスに基づく嚥下機能の評価方法の検討

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

＜研究者の変更状況（研究代表者を含む）＞

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究	看護福祉学部・助教	鹿内　あずさ	生活の場による食行動の特性をふまえた看護援助方法を確立する

（変更の時期：平成 20 年 3 月 31 日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
看護福祉学部・助教	訪問看護ステーションあいしん		

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科・助教	千葉　由美	

（変更の時期：平成 21 年 4 月 1 日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科・助教	千葉県立保健医療大学・准教授	千葉　由美	

※所属変更

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

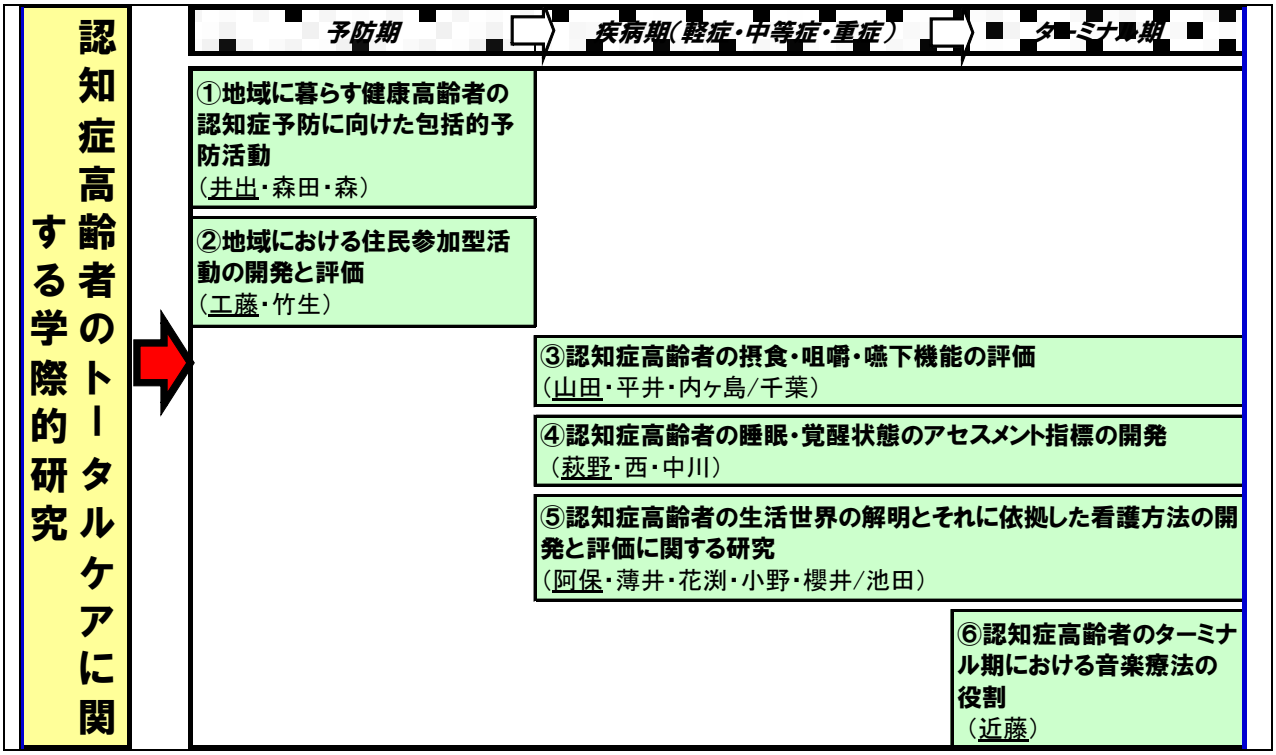
１０　研究進捗状況（※　５枚以内で作成）

（１）研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

認知症高齢者の研究は、脳生物学的な研究などによって進展しつつあるが、人々の生活という観点にたてば、彼らのケアの方法を確立していくことは必須である。ケアは人と人の間に現象することであり、社会をバックボーンとしている。したがって、ケアは、経済や施策、人間の尊厳といった社会基盤状況の観点、健康な時点を含め予防から疾病期、ターミナル期という時間の観点、ケアが行われる施設や地域という場の観点、ケアにかかわる人々という人的観点からのアプローチが必要である。本研究では、こういった観点からケアをトータルに捉え、21世紀における世界の最重要課題である認知症高齢者のトータルケアを目指す。

認知症高齢者のケアは、本人・家族や地域の人々・専門職者の３者間で繰り広げられている。また、認知症高齢者本人への直接的ケアに関しても、嚥下機能や不可解な行動の意味やそれへの対応など、複雑な要素が絡み合って成立している不明な領域が多々残されている。本研究では、そのような現状を踏まえ、認知症高齢者の予防期からターミナル期までを視野におさめ、一方ではケアにかかわる本人・家族や地域の人々・専門職者間に新たに生じている問題の実態を把握し、もう一方では、複雑系に属する本人への直接的なケアの方法を開発する。最後に、認知症高齢者のトータルケアの全体図を構成することを目的とする。

（２）研究組織



（３）研究施設・設備等

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】（山田・内ヶ島・平井・千葉）

研究設備の面積：455 ㎡（北海道医療大学歯学部咬合再建補綴学講座研究室、北海道医療大学歯科内科クリニック、北海道医療大学動物実験センター、北海道医療大学病院、札幌医科大学保健医療学部）

使用者数：15 名

研究装置・設備：電子スピン共鳴装置（ESR）（約 32 時間）、Videofluorography（東芝社製 KXO-50N）（約 5 時間）、超音波診断装置（SSD-630, Aloka）（約 5 時間）

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

（4）進捗状況・研究成果等

＜現在までの進捗状況及び達成度＞

【地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動】（井出・森田・森）

平成 19 年度：高齢者の認知症対策として行われている取り組みや活動を調査し、研究プロジェクトの方向性の確認と準備を進めた。

平成 20 年度：石狩市の運動教室を拠点とし、体力トレーニングによる認知症予防対策の効果検証を行った。その結果、包括的予防活動を行うためには、健康高齢者という定義に問題があることが議論され、プロジェクトを「地域に暮らす高齢者の認知症対策としての（予防）活動プロジェクト」として組みなおし、認知症になってからの予防活動をも含めたプロジェクトを平行して進めることとした。

平成 21 年度：石狩市における体力トレーニング教室での活動を継続すると共に、認知症になった方々の外出支援活動を展開し、健康な高齢者から認知症高齢者までを含めた包括的なプロジェクトとして研究を展開している。

【地域における住民参加型活動の開発と評価プロジェクト】（工藤・竹生）

平成 19 年度：認知症理解の啓発と地域づくりのあり方を明らかにするために「認知症サポーター100万人キャラバン事業」を先駆的に行っている 2 市町のキャラバンメイト登録者 21 名に面接インタビューを行い、活動の内容と意向を質的に分析した。

平成 20 年度：北海道内の認知症キャラバンメイト登録者約 2 千名に、活動の内容と意識に関する調査を郵送法で実施し、約 48%の有効回収を得た。統計的解析の結果、6 割以上が認知症の理解のための啓発や支援活動を実施していること、今後の活動意向が高いこと、活動の促進・阻害要因などを明らかにした。

平成 21 年度：平成 20 年度に実施した北海道内キャラバンメイト全登録者への調査をもとに、自由記載データの質的分析を行い、認知症キャラバンメイト活動に関する登録者の思い、活動のあり方を明らかにする予定である。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】（山田・内ヶ島・平井・千葉）

平成 19 年度：①認知症高齢者の摂食・嚥下機能の特徴と評価法に関する国内外の文献検討を行い、特に認知症の原因疾患別にみた摂食・嚥下障害の特徴について検討を行った。 ②嚥下機能に関して、汎用超音波診断装置、生体心音マイクを用い、さらに内視鏡画像を参照として嚥下機能障害者と健常者の嚥下動態を検討したところ、本システムにおける舌運動と嚥下音の利用が有効性であることを確認した。 ③摂取可能食品アンケート法による咀嚼能力評価法としての検査用 25 食品を定め、さらに咀嚼能力ポイント算出法を確立し、全部床義歯装着者の咀嚼能力が患者の顎堤形態によって明らかに差のあることを確認した。 ④脳梗塞後のリハビリテーションにおける咀嚼の有効性を検討するために、脳梗塞モデルラットの作製方法を確立した。 ⑤ラットにおける飼料飼育形態とストレスとの関係を検討した結果、血中カテコールアミン量の有意な差を確認した。

平成 20 年度：①わが国における認知症高齢者の摂食・嚥下機能評価における現状と課題について明らかにするため、共同研究者の千葉らが行った高齢者施設の実態調査をもとに、認知症の診断をリコードし、認知症の診断がある場合とない場合とで比較検討した。 ②脳梗塞モデルラットの回復過程において、液体飼料飼育は固形飼料飼育に比して、感覚運動機能が明らかに低下していることを確認した。 ③液体飼料によって飼育されたラットにおいて、飼料変更後 7 日目、14 日目、21 日目における好中球のスーパーオキシド産生能は、固形飼料によって飼育されたそれに比して、有意に増加していることを確認した。

平成 21 年度：①平成 19 年度の文献検討および平成 20 年度の実態調査をもとに、平成 21 年度は認知症高齢者に特徴的な摂食・嚥下機能の評価方法について検討し、評価指標を作成中である。 ②脳梗塞モデルラットの回復過程において、液体飼料飼育は固形飼料飼育に比して、空間的学習・記憶機能が明らかに低下していることを確認した。 ③液体飼料によって飼育されたラットにおいて、飼料変更 28 日目から、固形飼料によって飼育されたそれよりも、血清抗酸化能とスーパーオキシドジスムターゼ様活性の有意な低下が認められた。

以上のように、申請時に提出した研究計画書に従って順調に遂行すると共に、研究成果によって見出された新たな課題に対しても、さらに研究手法を拡大しながら進めている状況である。

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】（萩野・西・中川）

平成 19 年度：①認知症をもつ人に対する睡眠ケアの現在の課題を整理するために、病院や介護保険施設における高齢者への睡眠ケアについての文献検討を行った(萩野，西)。 ②認知症をもつ人の潜行性の意識障害・変容を鋭敏に検知できる評価法を確立するために、意識の低下・変容による行為や動作の障害と、大脳機能低下による行為や動作の障害を観察によって鑑別するための指標の作成を目指す。平成 19 年度では、意識障害のない対象の器質性の行為・動作障害を分類する動作区分を作成した(中川)。

平成 20 年度：①ケア提供者が日常的に使用可能な睡眠・覚醒の測定方法と生活上の変化を評価する視点についての検討を行った(萩野，西)。 ②認知症をもつ人の潜行性の意識障害・変容を鋭敏に検知できる評価法を確立するために、さらに対象例を重ねて検討するともに、意識障害のある対象の器質性の行為・動作障害についても並行して検討した(中川)。

平成 21 年度：札幌市内及び近郊の高齢者施設において、睡眠・覚醒障害をもつ認知症高齢者を対象に、生活の場の光環境調整を行う。睡眠・覚醒リズムの変化とそれに伴い現れた生活上の変化について記述を重ねていく(萩野，西)。

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】（阿保・薄井・花渕・小野・櫻井・池田）

平成 19 年度：①認知症をめぐる諸問題と研究方法における課題を明らかにした（阿保・池田）。 ②グループホームに暮らす認知症の夫婦の経過を参加観察した（阿保）。 ③認知症をめぐる会話上のコンフリクトを緩和するための社会学的デザインを考案し、「会話分析プロファイル」の日本語版への移行と質問項目の簡易化と一定の再構成に着手した（薄井）。 ④日本との比較を念頭に、アメリカの公的医療保険制度のメディケアと医療扶助のメディケイドに関する公的介護保障の特徴を明らかにした（櫻井）。 ⑤人類学における認知症研究の動向と可能性を文献検討した（花渕）。 ⑥老いゆく脳と活性化の問題、認知と言葉を超えた世界について考察した（小野）。

平成 20 年度：①認知症の医療化と脱医療化の観点から、認知症を「ぼけの復権」という形で日常生活にとりもどすことの必要性について検討した（阿保・池田）。 ②グループホームでの参加観察の継続に加え、2 カ所の老人病院で、重度の認知症の人々の暮らしへの参加観察を開始した。後者では、身体合併症による影響が、攻撃行動など彼らがとるさまざまな行動に影響を与えていることが示唆されている（阿保）。 ③Conversation Analysis Profile for People with Cognitive Impairment(1997)を日本語に翻訳し、日本の実情に合うように改変を試みた（薄井）。 ④ヴァージニア州フェアファックス郡役所の職員や NPO に対してヒアリング調査から、アメリカのミドルクラスの高齢者が利用する介護サービスや地域介護システム、介護サービス市場、介護保障などの特徴をや構造を明らかにした（櫻井）。 ⑤健康な身体や記憶を称揚し、高齢者の自立を促す「老い」をめぐる言説について分析した（花渕）。 ⑥ガザガニや大井の文献から神秘主義的な世界観と認知症の世界観について考察した（小野）。

平成 21 年度：①認知症をぼけの復権、老いの医療化、認知症の医療人類学という三つの課題に沿って検討している（池田）。 ②19 年度、20 年度からの参加観察を継続している。また、池田とともに、三つの課題に加え、認知症を患う人をトータルにみる実践についての検討も行っている（阿保）。 ③「会話分析プロファイル」を家族や介護スタッフの質問票を改変する作業を進めている。また調査対象である施設との交渉を進めている（薄井）。 ④19 年度と 20 年度の研究成果をもとに、アメリカの公的介護保障に関する官公庁の資料の検討や統計資料の計数的検討を行うとともに、日本の医療保険制度と介護保険制度との比較検討を行っている（櫻井）。 ⑤「老い」をめぐる言説の分析から、認知症ケア言説による高齢者の主体化がはらむ逆説的問題について検討を進めている（花渕）。 ⑥20 年度の検討課題を継続し、倫理的課題について検討している（小野）。

【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の可能性】（近藤）

平成 19 年度：音楽療法士や医療福祉従事者からのアンケート調査から、認知症高齢者の音楽療法の現状を明らかにしようと試みた。その結果、音楽療法が有効に活用されるためには、医療福祉現場での音楽療法の理解を深めること、施設や病院、在宅での環境や人的資源を考慮する必要があることが明らかになった。

プロジェクト番号	07F001

平成 20 年度：病院や施設職員に対する音楽療法の啓蒙・啓発教育を実施した。また、実際の現場の環境や人的資源を有効に活用し、ターミナル期にある認知症高齢者へ、音楽が療法的に働きかける環境づくりを模索している。

平成 21 年度：認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の有効性を最大限に発揮するには、本人のみならず、ケアに関わる家族の持つ、ケアについての視点も重要であることが明らかになった。本年度は特に、家族の視点から、音楽療法の「場」のもたらす意味を探っている。

＜特に優れた研究成果＞

【地域における住民参加型活動の開発と評価プロジェクト】（工藤・竹生）

平成 20 年度に、北海道と札幌市の認知症対策部署担当者から、認知症の人の暮らしやすい地域づくりのあり方を明らかにするという研究目的への全面的な理解を頂き、認知症キャラバンメイト登録者の個人情報を保護しつつ、北海道内の全登録者約 2 千名への悉皆調査ができた。このことにより、全国で初の認知症キャラバンメイトからみた活動実態と意識が解明されたとともに、信頼性、妥当性の高いデータを得られた。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】（山田・内ヶ島・平井・千葉）

①認知症の原因疾患別の摂食･嚥下機能の特徴について、国内外の系統的に文献レビューに基づき示されたものはなく、今回の研究成果を論文や教育講演等で公表することで多くの反響を得た。②疫学調査で使用可能な簡便で、有用な咀嚼能力評価法を確立することができた。 ③咀嚼障害とそれに類する不都合がストレッサーとなりうることが示唆された。 ④脳梗塞の回復過程における咀嚼の有効性が示唆された。

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】（阿保・薄井・花渕・小野・櫻井・池田）

認知症の医療化と脱医療化の観点から、医療化にまみれた認知症という言葉を「ぼけの復権」という形で日常生活にとりもどすことの必要性について、また、認知症を患う人をトータルにみる実践についての理念に関する一定の見解をまとめることができ、単行本化を進めている。

＜問題点とその克服方法＞

【地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動】（井出・森田・森）

認知機能の測定にMMSEを用いてきたが、測定に時間と人が掛かりすぎすぎている状況がある。新たな測度を用いることで、よりコストエフェクティブに整える。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】（山田・内ヶ島・平井・千葉）

①認知症の疾患別に摂食･嚥下機能評価指標を確立したいところだが、臨床実践の場においては、認知症の診断はあっても、原因疾患まで鑑別診断されている場合が少ないため、原因疾患別の特徴的な症状も併せて把握していく。 ②脳梗塞の回復過程における咀嚼の有効性に関するさらなる検討を行うために「永久脳梗塞モデルラット」に加えて、「一過性脳梗塞モデルラット」の作製とそれを用いた同様の実験を行う必要がある。

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】（阿保・薄井・花渕・小野・櫻井・池田）

認知症の人々の諸行動は観察できてきたが、合併症の影響をどのように取り扱っていくかが課題として浮かび上がってきている。合併症がもたらす生物学的変化について、有識者からの意見を求め、行動の解釈をより正確なものにしていく必要がある。

＜研究成果の副次的効果（実用化や特許の申請など研究成果の活用の見通しを含む。）＞

【地域における住民参加型活動の開発と評価プロジェクト】（工藤・竹生）

平成 20 年度の認知症キャラバンメイト登録者の全道・札幌市の活動実態と意識に関するデータ解析結果について、行政の担当者を対象にした報告会を持ったことにより、結果から得られた研修の持ち方などの課題が、平成 21 年度の認知症の啓発に関する事業計画に反映された。

＜今後の研究方針＞

【地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動】（井出・森田・森）

①認知機能に関する指標にファイブ・コグを加えた測定を実施し、その指標と身体活動量や身体活動の種類の関連性について検討する。 ②認知症を患ったあとの予防活動としての取り組みを継続し、

プロジェクト番号	07F001

実態の把握と活動の効果を検討する。

【地域における住民参加型活動の開発と評価プロジェクト】（工藤・竹生）

［認知症理解の啓発と認知症の人が暮らしやすい地域づくりのあり方に関する研究］

平成 22 年度以降は、認知症キャラバンメイトによる啓発活動の効果評価として、啓発の対象者として講座に参加した「認知症サポーター」に焦点を当てる。認知症サポーターとして、獲得したこと、サポーターとしての実践、意向などを明らかにし、認知症の人が暮らしやすい地域づくりのための、認知症キャラバンメイト、認知症サポーター、行政や関連職種の関わり方を検討する予定である。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】（山田・内ヶ島・平井・千葉）

①22 年度は、21 年度に作成した認知症高齢者の摂食・嚥下機能の評価指標の信頼性・妥当性および実施可能性について検討する予定である。 ②総合的な咀嚼能力に関する評価指標の信頼性および妥当性を検討するために、篩分法による咀嚼効率と本法による咀嚼スコアとの相関を検討する。

【認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発】（萩野・西・中川）

認知症高齢者の睡眠・覚醒状態のアセスメント指標の開発。認知症のタイプ別により睡眠障害の特徴はみとめられるか、事例を重ねていく。

【認知症高齢者の生活世界の解明とそれに依拠した看護方法の開発と評価に関する研究】（阿保・薄井・花渕・小野・櫻井・池田）

生活世界に沿った看護方法の開発とその評価を行う予定である。

【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の可能性】（近藤）

これまでのアンケートやインタビュー調査に基づき、それぞれの環境やニーズに沿った音楽療法の実践を通じて、認知症高齢者のターミナル期における音楽療法がどのような役割を担っているのか評価する。

＜今後期待される研究成果＞

【地域における住民参加型活動の開発と評価プロジェクト】（工藤・竹生）

認知症の人が暮らしやすい地域づくりについて、啓発を進めるキャラバンメイトと認知症サポーター、行政や関連職種の実際の関わり方とあり方を明らかにしていく。これらの結果を統合して、認知症の人が暮らしやすい地域づくりについて、地域の規模や特性別の活動ガイドライン等を試案作成し、各地域で現場の関係者に有用な情報の提供をめざす。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】（山田・内ヶ島・平井・千葉）

①平成 20 年度の全国高齢者施設を対象とした調査で、認知症高齢者の栄養摂取法に最も影響力が強かった要因は嚥下障害ではなく「寝たきり度」だったことから、本評価指標の確立により、廃用性の摂食･嚥下機能の低下を早期に予防し、認知症高齢者が可能な限り経口摂取を維持していくことにも貢献する。 ②少数例での検討は終了しており、平成 23 年度には、実用可能と思われる。

【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の可能性】（近藤）

認知高齢者のターミナル期における音楽療法の役割について、ケアにかかわる音楽療法士、医療福祉従事者、家族など様々な視点から焦点を当てることにより、音楽療法の根源的な役割と多様な活用方法が浮かび上がってきて、音楽療法の活用の範囲が広がることが期待できる。

＜プロジェクトの評価体制（自己評価・外部評価を含む。）＞

研究経過とその成果については、各年度ごとに発表会を開催している。そこで研究科教員のみならず、学外の有識者をまじえてのディスカッションを行っており、活発な意見が出されるとともに、研究内容への意義が確認されている。また、発表会の内容については研究科委員会に提出され、そこで精査される。1 年目に行った公開シンポジウムにおいては、参加者に内容の意義や意味についてのアンケートを行った。その結果、非常に有意義な研究であると評価されている。そのほか、摂食・咀嚼・嚥下機能の評価の研究は、その成果が脳梗塞後の認知症状態におけるリハビリテーションにおける咀嚼の重要性を示唆するものであるとして、北海道新聞で取り上げられ掲載された。さらに、本研究プロジェクトについては、日本私立看護系大学協会会報において、加盟校のユニークな取り組みとして紹介してほしい旨の依頼があり、その内容について掲載された。

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

１１　キーワード（当該研究内容をよく表していると思われるものを８項目以内で記載してください。）

（1）認知症予防　（2）住民参加　（3）摂食・嚥下　（4）咀嚼能力

（5）睡眠・覚醒リズム　（6）生活世界　（7）介護保険　（8）言葉を超えたコミュニケーション

１２　研究発表の状況（研究論文等公表状況。印刷中も含む。）

（以下の各項目が網羅されていれば、枠にはこだわらなくてもよい。）

平成 19 年度

＜雑誌論文＞

著者名	論文標題			
工藤禎子	都市部に引越した要支援・要介護高齢者の生活変化と心身の状態			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
老年社会科学	有り	29(4)	平成 20 年	553-560

著者名	論文標題			
山田律子	認知症の人の日常生活における困難とケアのポイント一食事ケア			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
看護技術	無	98(6)	平成　19　年	39-45

著者名	論文標題			
Kazuhiro Shimoyama, Yumi Chiba, Yoriko Suzuki	The effect of awareness on the outcome of oral health performed by home care service providers.			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Gerodontology	有	24	平成 19 年	204-210

著者名	論文標題			
千葉由美	摂食・嚥下障害を有する患者のケースマネジメント			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
看護技術	有	53（14）	平成 19 年	1293-1296

著者名	論文標題			
千葉由美	摂食・嚥下障害に関する教育・実践・研究への取り組みと課題			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本摂食・嚥下ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学会誌	有	11(2)	平成 19 年	158

著者名	論文標題			
Kang Y, Denpo Y, Ohashi A, Saito M, Tyoda H, Sato H, Koshino H, Maeda Y, Hirai T.	Nitric oxide activates leak K(+) currents in the presumed cholinergic neuron of basal forebrain.			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
J Neurophysiol	有	98(6)	平成　19　年	3397-3410

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

＜図書＞

著者名	出版社		
工藤禎子	医歯薬出版株式会社		
書名		発行年	総ページ数
佐伯和子編著「地域看護アセスメントガイド」地域看護アセスメントと評価の実際（高齢者保健活動の実践例）		平成 19 年	84-93

著者名	出版社		
山田律子	医歯薬出版		
書名		発行年	総ページ数
訪問看護における摂食・嚥下リハビリテーション：退院から在宅まで（担当：認知症をもつ人の摂食・嚥下に関するアセスメント		平成 19 年	25-30, 82-89

著者名	出版社		
山田律子	医歯薬出版		
書名		発行年	総ページ数
認知症高齢者の看護（担当：Ⅳ-2. 認知症高齢者の生活環境づくり）		平成 19 年	79-99

著者名	出版社		
阿保順子監訳	医学書院		
書名		発行年	総ページ数
看護診断に基づく精神看護ケアプラン		平成 19 年	532

著者名	出版社		
阿保順子監訳	誠信書房		
書名		発行年	総ページ数
アルツハイマーのための新しいケアー語られなかった言葉を探して		平成 19 年	296

著者名	出版社		
花渕馨也	学陽書房		
書名		発行年	総ページ数
医療人類学のレッスン：病をめぐる文化を探る		平成 19 年	76-98

＜学会発表＞

発表者名	発表標題		
工藤禎子	引越した高齢者が感じている身体の変化と引越後の生活に対する思い		
学会名		開催地	発表年月
第 49 回日本老年社会科学学会老年社会科学,29(2),報告要旨号,p276,		札幌	平成 19 年 7 月

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

発表者名	発表標題	
竹生礼子，川村三希子，小島悦子，福田ひとみ，柳谷幸枝	訪問看護師に対する効果的ながん疼痛マネジメントの教育プログラムの検討；実践に役立てられるよう検討した講義の評価	
学会名	開催地	発表年月
第 12 回日本緩和医療学会総会	岡山	平成 19 年 6 月

発表者名	発表標題	
竹生礼子	入院中の高齢がん患者が自宅で療養するために必要だと考えていること	
学会名	開催地	発表年月
第 17 回日本看護研究学会北海道地方会学術集会	札幌	平成 19 年 6 月

発表者名	発表標題	
内ヶ島伸也，井出訓，山田律子	認知症高齢者の日常生活ケアに関わる意思決定能力の特徴	
学会名	開催地	発表年月
第 8 回日本認知症ケア学会大会	盛岡	平成 19 年 10 月

発表者名	発表標題	
千葉由美	摂食・嚥下障害を有する利用者の栄養摂取法に関する検討～病院・長期療養施設・在宅の比較～	
学会名	開催地	発表年月
第 27 回日本看護科学学会学術集会,	東京	平成 19 年 12 月

発表者名	発表標題	
森田久美子,佐々木明子,鈴木恭子,千葉由美	デイサービスを利用している高齢者への口腔、摂食・嚥下ケア実施の効果-1 年間の介入前後での比較	
学会名	開催地	発表年月
第 10 回日本地域看護学会	神奈川	平成 19 年 7 月

発表者名	発表標題	
鈴木恭子,佐々木明子,森田久美子,千葉由美	高齢者の介護度と摂食・嚥下機能及び口腔感想と QOL との関連	
学会名	開催地	発表年月
第 10 回日本地域看護学会	神奈川	平成 19 年 7 月

発表者名	発表標題	
千葉由美,田高悦子,佐々木明子	全国の在宅療養者における摂食・嚥下障害　有症率ならびにその特性に関する調査	
学会名	開催地	発表年月
第 10 回日本地域看護学会	神奈川	平成 19 年 7 月

発表者名	発表標題	
森田久美子,佐々木明子,千葉由美,寺岡加代,大塚陽一,中山京英,鈴木恭子	デイサービスを利用している高齢者への口腔、摂食・嚥下ケア実施の効果-半年間の介入前後での比較-	
学会名	開催地	発表年月
第 11 回日本在宅ケア学会学術集会	埼玉	平成 19 年 3 月

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

発表者名	発表標題	
Yumi Chiba,Hiroshi Uematsu, Masanaga Yamawaki, Haruka Tohara	Study related to tube-feeding of dysphagic institutionalized elderly in Japan.	
学会名	開催地	発表年月
The 16th Dysphagia Research Society Meeting	South Carolina US	平成 20 年 3 月

発表者名	発表標題	
田中真樹、越野　寿、岩崎一生、横山雄一、平井敏博.	ラット飼育飼料形態の血液指標への影響	
学会名	開催地	発表年月
第 116 回日本補綴歯科学会	神戸	平成 19 年 5 月

発表者名	発表標題	
川西克弥、越野　寿、鈴木裕仁、豊下祥史、岩崎一生、田中真樹、横山雄一、平井敏博	咀嚼機能に関する研究のための脳梗塞モデルラットの作製	
学会名	開催地	発表年月
第 26 回北海道医療大学歯学会	札幌	平成 19 年 3 月

発表者名	発表標題	
松原国男、越野　寿、木下憲治、服部佳子、平井敏博	内視鏡画像と嚥下音を利用する嚥下機能評価法に関する検討	
学会名	開催地	発表年月
第 18 回日本老年歯科医学会	札幌	平成 19 年 6 月

発表者名	発表標題	
越野　寿、横山雄一、平井敏博、細井紀雄	全部床義歯装着者の下顎顎堤形態と咀嚼機能　ー新・旧義歯の比較からー	
学会名	開催地	発表年月
第 18 回日本咀嚼学会	大阪	平成 19 年 8 月

発表者名	発表標題	
Toyoshita Y, Matsubara K, Koshino H, Hirai T, Furukawa Y.	Evaluation Method of Swallowing Function by Swallowing Sound and Endoscope	
学会名	開催地	発表年月
11th Meeting of the International College of Prosthodontists	Fukuoka	平成 19 年 9 月

発表者名	発表標題	
Matsubara K, Koshino H, Toyoshita Y, Yokoyama Y, Tanaka T, Sudo E, Iwasaki K, Hirai T, Furukawa Y.	Evaluation Method of Swallowing Function in Disabled Patients with Dysphagia by Swallowing Sound and Endoscope.	
学会名	開催地	発表年月
The Japan Prosthodontic Society (JPS) and The Greater New YorkAcademy of Prosthodontics hold the 2nd joint meeting	Tokyo	平成 19 年 10 月

発表者名	発表標題	
豊下祥史、越野　寿、横山雄一、平井敏博、細井紀雄、渡辺信行	無歯顎患者の下顎義歯支持基盤形態が咀嚼能力に及ぼす影響	
学会名	開催地	発表年月
平成 19 年度　日本補綴歯科学会　東北・北海道支部学術大会	小樽	平成 19 年 11 月

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

発表者名	発表標題	
川西克弥、越野　寿、鈴木裕仁、豊下祥史、岩崎一生、田中真樹、横山雄一、平井敏博	咀嚼機能に関する研究のための脳梗塞モデルラットの作製	
学会名	開催地	発表年月
第 26 回北海道医療大学歯学会	札幌	平成 20 年 2 月

発表者名	発表標題	
鈴木裕仁、田中真樹、川西克弥、豊下祥史、越野　寿、平井敏博	ラットにおける咀嚼機能が抗酸化に及ぼす影響	
学会名	開催地	発表年月
第 26 回北海道医療大学歯学会	札幌	平成 20 年 2 月

平成 20 年度

＜雑誌論文＞

著者名	論文標題			
竹生礼子	日本における 1990 年以降の在宅死と病院死に関連する要因の文献的検討			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	-ページ
日本地域看護学会誌	有り	11(1)	平成 20 年	87-92

著者名	論文標題			
山田　律子他	高齢者訪問看護の質指標開発の検討－全国の訪問看護ステーションで働く看護師による自己評価			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本看護科学学会誌	有	28 巻	平成　20　年	37-45

著者名	論文標題			
山田律子	認知症の人にみる摂食・嚥下障害の特徴と食事ケアー認知症の病型別特性を踏まえて			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
認知症ケア事例ジャーナル	無	1巻	平成　20　年	428-436

著者名	論文標題			
内ヶ島伸也	認知症高齢者の日常生活ケアに関わる「選択の表明」能力と「論理的思考」能力の特徴			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
北海道医療大学看護福祉学部学会誌	有	5(1)	平成　21　年	39-47

著者名	論文標題			
千葉由美，市村久美子	認定看護師と看護師の摂食・嚥下障害看護に対する認識の相違			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本摂食･嚥下リハビリテーション学会誌	有	12(3)	平成 20 年	178-186

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

著者名	論文標題			
森田久美子,佐々木明子,寺岡加代,千葉由美,山崎恭子,大塚陽一,中山京英,大島厚子,斉藤典子	デイサービスに通う高齢者への口腔、摂食・嚥下ケアの介入効果			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
公衆衛生	有	72(9)	平成 20 年	753-759

著者名	論文標題			
若杉葉子,戸原玄,中根綾子,後藤志乃,大内ゆかり,三串伸哉,竹内周平,高島真穂,都島千明,千葉由美, 植松宏	不顕性誤嚥のスクリーニング検査における咳テストの有用性に関する検討, 日本摂食嚥下咳テスト			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本摂食・嚥下リハビリテーション学会誌	有	12(2)	平成 20 年	109-117

著者名	論文標題			
千葉由美	なぜナースの摂食・嚥下障害への取り組みが必要なのか			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Nursing Today	無	23(5)	平成 20 年	11

著者名	論文標題			
千葉由美	病棟ナースが知っておくべきアセスメントの基本			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Nursing Today	無	23(5)	平成 20 年	17-29

著者名	論文標題			
千葉由美	-安全な摂食援助-アセスメントの基づくチェックポイント②			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Nursing Today	無	23(5)	平成 20 年	32-33

著者名	論文標題			
千葉由美	なぜナースの摂食・嚥下障害への取り組みが必要なのか			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Nursing Today	無	23(5)	平成 20 年	11

著者名	論文標題			
岩崎一生、越野　寿、平井敏博	ラットにおける粉末飼料飼育の情動活動に及ぼす影響－飼育飼料変更前後の自発運動量の測定－			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本咀嚼学会雑誌	有	18 巻	平成　20　年	29-36

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

著者名	論文標題			
Toyoda H, Saito M, Sato H, Dempo Y, Ohashi A, Hirai T, Maeda Y, Kaneko T, Kang Y.	cGMP activates a pH-sensitive leak K+ current in the presumed cholinergic neuron of basal forebrain.			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
J Neurophysiol	有	99 巻	平成 20 年	2126-2133

著者名	論文標題			
中川賀嗣	失行とは何か（失行の現況）．失行.高次脳機能障害各論.高次脳機能障害のすべて			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
神経内科	無	68[suppl. 5]	平成 20 年	279-288

著者名	論文標題			
中川賀嗣	概念失行、使用失行、パントマイム失行など一新たな可能性一．失行.高次脳機能障害各論.高次脳機能障害のすべて			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
神経内科	無	68[suppl. 5]	平成 20 年	301-308

著者名	論文標題			
中川賀嗣	運動無視．無視症候群・視空間性障害.高次脳機能障害各論.高次脳機能障害のすべて			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
神経内科	無	68[suppl. 5]	平成 20 年	432-438

著者名	論文標題			
中川賀嗣	失行について-使用失行の見かた、捉え方-.			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
認知神経科学	無	10	平成 20 年	77-87

著者名	論文標題			
中川賀嗣	失行の新しい分類と ADL 障害			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
MB Monthly Rehabilitation	無	99	平成 20 年	23-35

＜図書＞

著者名	出版社		
山田律子	日本看護協会出版会		
書名		発行年	総ページ数
高齢者訪問看護の質指標―ベストプラクティスを目指して		平成 20 年	186

著者名	出版社		
山田律子，井出訓(編著)	医学書院		
書名		発行年	総ページ数
生活機能からみた老年看護過程（担当：食事，摂食・嚥下障害）		平成 20 年	476

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

著者名	出版社		
阿保順子	批評社		
書名		発行年	総ページ数
精神看護という営み		平成 20 年	206

著者名	出版社		
山田律子・井出訓(編) 萩野悦子	医学書院		
書名		発行年	総ページ数
生活機能からみた老年看護過程+病態・生活機能関連図 第 2 部睡眠障害		平成 20 年	476 ページ中 11 ページ

＜学会発表＞

発表者名	発表標題		
若山好美、工藤禎子、竹生礼子、佐藤美由紀	認知症ボランティアの活動志向性とその関連要因, 認知症キャラバンメイト養成研修を受講したボランティアの調査から		
学会名		開催地	発表年月
日本在宅ケア学会		大阪	平成 21 年 3 月

発表者名	発表標題		
山田律子,萩野悦子,内ヶ島伸也，井出訓	経管栄養を受けている認知症高齢者が口から食べる力を見極めるためのガイドラインの作成　（研究奨励賞受賞）		
学会名		開催地	発表年月
第 18 回日本看護研究学会北海道地方会学術集会		札幌	平成 20 年 6 月

発表者名	発表標題		
山田律子	教育講演：摂食・嚥下		
学会名		開催地	発表年月
第9回日本認知症ケア学会大会		高松	平成 20 年 9 月

発表者名	発表標題		
Yamada,R, Chiba.U, Uchigashima,S	Factors determining feeding methods in dysphagic elderly with dementia in Japan		
学会名		開催地	発表年月
17th Annual Dysphagia Research Society Meeting		New Orleans，US	平成 21 年 3 月

発表者名	発表標題		
Yumi Chiba, Haruka Tohara	The Effectiveness of swallowing exercise for the elderly persons wity using day care, ,2009.3.		
学会名		開催地	発表年月
17th Dysphagia Research Society Meeting		New Orleans，US	平成 21 年 3 月

発表者名	発表標題		
川西克弥、田中真樹、鈴木裕仁、豊下祥史、横山雄一、越野　寿、平井敏博	ラットにおける咀嚼動態の変化が血清抗酸化能とスーパーオキサイド産生能に及ぼす影響		
学会名		開催地	発表年月
117 回日本補綴歯科学会		名古屋	平成 20 年 6 月

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

発表者名	発表標題	
越野　寿、川西克弥、豊下祥史、田中真樹、鈴木裕仁、岩崎一生、平井敏博	脳梗塞後のリハビリテーションへ果たす咀嚼の役割－モデルラットの作製と研究方法の確立へ向けて－	
学会名	開催地	発表年月
平成 20 年度日本歯科補綴学会九州・中国・四国支部合同学術大会	別府	平成 20 年 8 月

発表者名	発表標題	
鈴木裕仁、田中真樹、川西克弥、豊下祥史、越野　寿、平井敏博	ラットの液体飼料飼育は酸化ストレスを誘導する.	
学会名	開催地	発表年月
第 19 回日本咀嚼学会	東京	平成 20 年 9 月

発表者名	発表標題	
越野　寿、横山雄一、平井敏博	摂取可能食品アンケートを用いる全部床義歯装着者の咀嚼能力検査.	
学会名	開催地	発表年月
第 19 回日本咀嚼学会	東京	平成 20 年 9 月

発表者名	発表標題	
鈴木裕仁、越野　寿、平井敏博	ラットの液体飼料飼育が血清抗酸化能に及ぼす影響-電子スピン共鳴装置を用いたスピントラッピング法による測定-	
学会名	開催地	発表年月
第 18 回日本磁気歯科学会	埼玉	平成 20 年 10 月

発表者名	発表標題	
田中真樹、鈴木裕仁、川西克弥、佐々木みづほ、渡部真也、豊下祥史、越野寿、武田秀勝、藤井博匡、平井敏博	ラットの液体飼料飼育は、酸化ストレスを誘導する.	
学会名	開催地	発表年月
第 24 回日本ストレス学会	大阪	平成 20 年 10 月

発表者名	発表標題	
佐々木みづほ、越野　寿、川西克弥、豊下祥史、鈴木裕仁、岩崎一生、平井敏博	咀嚼機能に関する研究のための「一過性脳梗塞モデルラット」の作製	
学会名	開催地	発表年月
第 27 回北海道医療大学歯学会	札幌	平成 21 年 2 月

発表者名	発表標題	
Yumi Chiba, Haruka Tohara	The Effectiveness of swallowing exercise for the elderly persons wity using day care, ,2009.3.	
学会名	開催地	発表年月
17th Dysphagia Research Society Meeting	New Orleans US	平成 21 年 3 月

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

発表者名	発表標題	
中川賀嗣，阿久津由紀子，大槻美佳，石田義則	移動動作に重篤な障害を呈した体性感覚障害の 1 例	
学会名	開催地	発表年月
東北神経心理	仙台	平 20 年 1 月

発表者名	発表標題	
中川賀嗣,大槻美佳,上杉春雄，秋野実,斎藤久	体性感覚の行為・動作への関与	
学会名	開催地	発表年月
第 32 回日本高次脳機能障害学会総会	松山	平 20 年 11 月

発表者名	発表標題	
中川賀嗣，大槻美佳,田島康敬，松本昭久	左手一側性に観察された随意動作の障害について	
学会名	開催地	発表年月
第 32 回日本神経心理学会総会	東京	平 20 年 9 月

発表者名	発表標題	
中川賀嗣，大槻美佳，松本昭久	複数物品の系列的操作を支える能力	
学会名	開催地	発表年月
第 32 回日本神経心理学会総会	東京	平 20 年 9 月

発表者名	発表標題	
飯田貴映子，中島紀恵子，酒井郁子，諏訪さゆり，大塚眞理子，坂井さゆり，得居みのり，新山真由美，萩野悦子，藤田冬子，渕田英津子，松澤有夏，渡辺みどり，高山紘子	老人保健施設入所者の生活リズム障害へのアセスメントとケアの概念化	
学会名	開催地	発表年月
日本老年看護学会第 13 回学術集会	金沢	平成 20 年 11 月

発表者名	発表標題	
近藤里美	Arts Based retreat for music therapist working in Hospice/Palliative Care	
学会名	開催地	発表年月
12th World Congress of Music Therapy	Brisbane, Australia	平成 20 年 7 月

発表者名	発表標題	
近藤里美	Voices: 音楽療法がもたらしているもの	
学会名	開催地	発表年月
北海道医療大学看護福祉学部学会学術大会	札幌	平成 20 年 9 月

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

平成 21 年度

＜雑誌論文＞

著者名	論文標題			
井出訓	認知症サポートの輪を広げる―認知症フレンドシップクラブ			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
月刊福祉	無	92	平成 21 年	74－77

著者名	論文標題			
竹生礼子、工藤禎子、若山好美、佐藤美由紀	地域における認知症の啓発活動を担うボランティアの活動内容と活動意向			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
日本在宅ケア学会	有り		平成 21 年	印刷中

著者名	論文標題			
Kawanishi K, Koshino H, Toyoshita Y, Tanaka M, Hirai T	Effect of Mastication on Functional Recoveries after Permanent Middle Cerebral Artery Occlusion in Rats			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases	有	in press	平成 21 年	in press

著者名	論文標題			
Yumi Chiba, Kazuhiro Shimoyama, Yoriko Suzuki.	Recognition and behavior related to oral care caregiver managers in the community			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
Gerodontology	有	26	平成 21 年	112-121

著者名	論文標題			
Yumi Chiba,Akiko Sasaki,Kumiko Morita, et.al.	Effectiveness of care intervention related to ingestion and deglutition for the elderly using day in the community.			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
International Medical Journal	有	in press	平成 21 年	in press

著者名	論文標題			
萩野悦子	認知症の長期経過のケア			
雑誌名	レフェリー有無	巻	発行年	ページ
老年精神医学雑誌	無し	20	平成 21 年	646-650

＜図書＞

著者名	出版社		
細井紀雄、平井敏博、大川周二、市川哲雄（編・著）	医歯薬出版		
書名		発行年	総ページ数
無歯学補綴治療学（第2版）		平成 21 年	330

著者名	出版社		
北川公子(編), 萩野悦子	医学書院		
書名		発行年	総ページ数
系統看護学講座専門分野老年看護学, 生活リズム調整援助		平成 21 年秋発刊予定	

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

＜学会発表＞

発表者名	発表標題	
Satoshi Ide,Shinya Uchigashima	Dementia Friendship Club: A trial for developing a community system for people in dementia in Japan.	
学会名	開催地	発表年月
IAGG World congress of gerontology and geriatrics	France	平成 21 年 7 月

発表者名	発表標題	
竹生礼子、工藤禎子、若山好美、佐藤美由紀、明野聖子、桑原ゆみ	認知症高齢者が暮らしやすい地域づくりをめざすボランティアの市町村規模別にみた活動状況と意向	
学会名	開催地	発表年月
日本地域看護学会	千葉	平成 21 年 8 月

発表者名	発表標題	
竹生礼子、工藤禎子、若山好美、佐藤美由紀、明野聖子、桑原ゆみ	認知症高齢者が暮らしやすい地域づくりをめざすボランティアの活動に関連する要因、認知症キャラバンメイトの活動状況からの検討	
学会名	開催地	発表年月
日本老年看護学会	札幌	平成 21 年 9 月

発表者名	発表標題	
山田律子	シンポジュウムⅡ基調講演「認知症の病型別にみた摂食･嚥下障害の特徴と食事ケア」	
学会名	開催地	発表年月
第 20 回日本老年歯科医学会総会・学術大会	横浜	平成 21 年 6 月

発表者名	発表標題	
内ヶ島伸也	認知症高齢者の日常生活ケアに関わる「選択の表明」能力と「論理的思考」能力の特徴	
学会名	開催地	発表年月
北海道医療大学看護福祉学部学会第 6 回学術大会	札幌	平成 21 年 9 月

発表者名	発表標題	
山田律子,千葉由美,北川公子,小野塚元子,鳥田美紀代,坂井志麻,長瀬亜岐	介護老人保健施設および療養病床において胃瘻離脱に成功した高齢者の特徴	
学会名	開催地	発表年月
第 15 回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会	名古屋	平成 21 年 8 月

発表者名	発表標題	
千葉由美,山田律子,坂井志麻,長瀬亜岐,北川公子	療養病床における胃瘻栄養法の離脱への取り組みの現状	
学会名	開催地	発表年月
第 15 回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会	名古屋	平成 21 年 8 月

発表者名	発表標題	
Yumi Chiba	Effectiveness of swallowing exercise for the elderly with using day care services in Japan.	
学会名	開催地	発表年月
4th ICCHNR	ｵｰｽﾄﾗﾘｱｱﾃﾞﾚｰﾄﾞ	平成 21 年 8 月

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

発表者名	発表標題	
Kawanishi K, Koshino H, Toyoshita Y, Aita H, Hirai T	Effect of Mastication on Functional Recoveries after the Permanent Middle Cerebral Artery Occlusion Using the Intraluminal Suture Technique in Rat.	
学会名	開催地	発表年月
The 6th Meeting of Asisn Academy of Prosthodontics(AAP)	Seoul	平成 21 年 4 月

発表者名	発表標題	
川西克弥、越野　寿、豊下祥史、佐々木みづほ、平井敏博	咀嚼機能が脳梗塞モデルラットの学習・記憶機能の回復に及ぼす影響	
学会名	開催地	発表年月
第 118 回日本歯科補綴学会	京都	平成 21 年 6 月

発表者名	発表標題	
川西克弥、越野　寿、豊下祥史、佐々木みづほ、會田英紀、平井敏博	咀嚼機能が脳梗塞発症後の経過に及ぼす影響	
学会名	開催地	発表年月
第 26 回日本老年学会	横浜	平成 21 年 6 月

発表者名	発表標題	
Nakagawa Y, Otski M, Tajima Y, Matsumoto A	Inability of voluntary movement of left hand with lesion of corpus callosum	
学会名	開催地	発表年月
19th Meeting of the E uropean Neurological Society	ミラノ	平成 21　6 月

発表者名	発表標題	
萩野悦子，酒井郁子，諏訪さゆり，根本敬子，飯田貴映子，岩鶴早苗，遠藤淑美，大塚眞理子，丸山優，坂井さゆり，人見裕江，渕田英津子，渡辺みどり，松澤有夏，渡邊智子	生活リズム障害の発生状況と背景要因の分析 生活リズム障害ケアプロトコール Ver.2 の開発に向けた調査から	
学会名	開催地	発表年月
日本老年看護学会第 14 回学術集会	札幌	平成 21　9 月

発表者名	発表標題	
遠藤淑美，萩野悦子，酒井郁子，諏訪さゆり，根本敬子，飯田貴映子，岩鶴早苗，大塚眞理子，丸山優，坂井さゆり，人見裕江，渕田英津子，渡辺みどり，松澤有夏，渡邊智子	生活リズム障害の発生状況と背景要因の分析 生活リズム障害ケアプロトコール Ver.2 の開発に向けた調査から	
学会名	開催地	発表年月
日本老年看護学会第 14 回学術集会	札幌	平成 21 年 9 月

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

＜研究成果の公開状況＞（上記以外）

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等
＜既に実施しているもの＞
平成 19 年 1 月 27 日　学術フロンティア公開シンポジウム
　会場：京王プラザホテル札幌　（参加者：300 名）
　10：00-12：30 「虚構としての認知症ケア-ためらうことの意味」
　13：00-15：00 「明日の認知症ケアをもとめて」

平成 19 年度文部科学省学術研究高度化推進事業学術フロンティア推進事業研究成果会
　日時：平成 20 年 9 月 4 日 16：00-19：30
　会場：北海道医療大学サテライトキャンパス　（参加者：80 名）

・北海道医療大学広報誌 ADVANCE No.137 p.4, 2008 年 12 月 26 日発行　平成 19 年度文部科学省学術研究高度化推進事業学術フロンティア推進事業研究成果報告会の実施に関する紹介記事
・日本私立看護系大学協会会報No.21　2009 年 5 月 1 日発行，Pp9-10　加盟校のユニークな取り組み「学術フロンティア推進事業「認知症高齢者のトータルケアに関する学際的研究」にて内容紹介

＜これから実施する予定のもの＞
平成 21 年 9 月 27 日　一般公開シンポジウム「認知症ケアにおける臨床の知」
　会場：札幌コンベンションセンター大ホール
　（参加者 1000 名予定，日本老年看護学会第 14 回学術集会共催）

平成 22 年 2 月 6 日　平成 21 年度学術フロンティア研究成果報告会
　会場：北海道医療大学サテライトキャンパス　（参加者：100 名予定）
　シンポジウムテーマ「脳機能と認知症の治療・ケアはどこまでわかってきたか」
　基調講演「高次脳機能科学と認知症（仮題）」

13　その他の研究成果等

「12　研究発表の状況」で記述した論文、学会発表等以外の研究成果があれば具体的に記入してください。

【地域に暮らす健康高齢者の認知症予防に向けた包括的予防活動】（井出・森田・森）
平成 20 年 11 月石狩市筋力トレーニング教室講演会にて前年度実施の同教室における認知機能および身体資質に関する成果について公表した。また、平成 21 年 2 月に江別市健康づくり教育評価研修会にて同様の公表を行った。

【認知症高齢者の摂食・咀嚼・嚥下機能の評価】（山田・千葉・内ヶ島・平井）
・北海道新聞 2009 年 8 月 19 日「脳梗塞からの回復　そしゃくが有効」（平井の研究成果の記事）

【認知症高齢者のターミナル期における音楽療法の可能性】（近藤）
＜学会講演＞
近藤里美 「緩和ケアと音楽療法」 第 7 回日本音楽療法学会学術大会　平成 19 年 9 月
近藤里美 「ケアする人のためのケア：音楽がもたらす場」 緩和医療学会　平成 20 年 5 月
＜高齢者と対象にした地域での講習会＞
近藤里美 「音楽療法」 池田町シニアカレッジ遊ゆう大学　平成 20 年 9 月
近藤里美 「音楽でからだと心をリフレッシュ」北海道医療大学生涯学習講座平成 20 年 9 月

（様式１）

プロジェクト番号	07F001

１４ 「選定時」に付された留意事項とそれへの対応

＜「選定時」に付された留意事項＞

研究内容がやや不明瞭だが、研究成果の実用化を期待できる。今後は、研究計画等を具体化したうえで、研究を進めることを期待する。なお、3 年目の中間評価において、上記留意事項を含め、進捗が見られない場合は、補助の打ち切りまたは研究費を減額することがあるので留意されたい。

＜「選定時」に付された留意事項への対応＞

付された留意事項に対し、どのような対応策を講じ、また、それにより、どのような成果があがったか等について、詳細に記載してください。

選定時の留意事項である研究内容の不明瞭さについては、これまでの研究経過に記載してあるように、非常に具体的な成果をおさめつつある。体力トレーニングと認知症予防の関係、認知症キャラバンメイトの活動のあり方、認知症高齢者に特徴的な摂食・嚥下機能の評価指標の作成、脳梗塞モデルラットの回復過程における固形飼料飼育の効果、認知症の人々の潜行性の意識障害・変容を鋭敏に検知できる評価法の確立、認知症の医療化の問題への提言、認知症の人々の会話における葛藤状態を緩和するための「会話分析プロファイル」の日本語版の作成、身体合併症と攻撃行動の関係、介護費用に関するアメリカと日本の比較検討、認知法の人々への音楽療法の効果とその役割など具体的な実践活動から成果がみられはじめている。今後、2 年間で、これらの具体的研究内容を統合していくことは十分に期待できるものと思われる。